

# 川柳

青木 十九郎  
重森 恒雄 選  
峯 裕見子

特選 不揃いのコーヒークップに朝が来た

犬上郡甲良町 上野 初子

(評) 現在完了形である。朝が来たよ、来ているよ、来てしまったよである。揃いのカップではないから二人にとつて初めての後朝だろう。どこか不安げな春が確実なものになろうとしている朝だ。(恒雄)

特選 今ここに平和あってこそ土筆摘む

須越町 島田 洋子

(評) 我が国は、昭和二十(一九四五)年の終戦以来、平和が続く、そのありがたさを享受している。しかし、最近の外国における武力行使からは、平和の維持について痛感させられている。作者の平和への心からの願いがある。(十九郎)

特選 かあさんと呼ぶ亡き夫に起こされる

鳥居本町 寺村 美恵

(評) この場合の「夫」は「つま」と読んだ。夢に出てきた夫に生前と同じ声音で「かあさん」と呼ばれて目が覚める。慕わしい思いが感じられるが、感情過多にならない表現と程よい省略の効果もあって、しみじみと心情の伝わる句となった。(裕見子)

入選 花束も拍手も波に乗ってくる

平田町 竹内 歌子

(評) やることなすこと全てが上手くいって、バットを振れば勝手にボールが当たってホームラン。そんな好調の波に乗って、花束も拍手もわいわいとやってくる。おいおいというラッキーも実力。(恒雄)

入選 逆転を信じ迷わず走り切る

犬上郡豊郷町 須田 さゆり

(評) 物事が計画通りに進まない場合、そこで諦めてしまうか、打開策を考えるか、決断を迫られる。作者は後者のやり遂げる道を選んだ。(十九郎)

入選 似たようで性格の異なる花づくり

八坂町 山本 はるか

(評) 何を植えるかに始まり、畝の作り方や肥料の種類、水遣りの頻度、みんなそれぞれ。花づくりに限らず、人生のあらゆることに繋がっていると作者は感じたのかもしれない。的確にものを見る目と、それを伝達する力を感じる。(裕見子)

入選 この辺は安全地帯ですきと

犬上郡多賀町 清水 容子

(評) 安心させておいて「きつと」とまた不安にさせる。何だよと苦笑いさせてもらう面白さ。でも、本当は「この辺は」は不満。絵が浮かばない。この丘とか山とか、崖とか穴とか、闇とか何とか。(恒雄)

入選 咲いて散る花にわたしの物語

近江八幡市 浅野 忍

(評) 樹木、種、球根などから目標とする花を咲かす。花を咲かせるまでの試練はそれぞれであり、懸命に努力している。作者は、自分の生き様を花に重ねているのである。(十九郎)

入選 冒険が終わり虫歯が痛み出す

八坂町 松本羊央

(評) 「冒険」も「虫歯」も、そのままの意味で捉えても良いのだが、喩えとして味わった。あらゆる義務も役目も果たし「やれやれ」と人生の終章を迎えた頃に訪れる不調を表現して共感を誘う。しかし、暗さを感じないのは「冒険」という一語の効果であろう。「そんなものだよ」という明るい諦観がある。(裕見子)



佳作 店頭に春「悔しさ」をにじませて

長浜市 野口成人

佳作 巣立つ子の足音はずむ春の駅

清崎町 柳本和子

佳作 イヤホンを少し叩いて花になる

稲里町 覇流 不良者

佳作 病院の窓十センチしか開かず

地藏町 佐古徳子

佳作 夫に効く魔法のことばありがとう

金剛寺町 高橋時子

佳作 忘れてたり思い出したりする時間

新海浜二丁目 森口 ゆめみ

佳作 迷います返すつもりでの免許証

大藪町 古川和子

佳作 反戦の声銃声を凌駕する

大藪町 小南苑子

佳作 ゆっくりと湯呑茶碗のいちご柄

近江八幡市 西村孝子

佳作 青春をひもとく午後の喫茶店

京町二丁目 川辺由子

佳作 掘りごたつ眠りの精がいるらしい

西沼波町 外海芳子

佳作 故郷の色が伝わる春電話

古沢町 野洲令子

佳作 出てみよう暖かい風吹いてくる

東近江市 河崎章

佳作 物忘れ黄昏の波うねりだす

米原市 西尾辰之

佳作 台本なし余生の日々のこち良さ

清崎町 辻哲雄

佳作 農耕の地に無理筋の重戦車

日夏町 浅井利行

佳作 優雅です後期高齢今が旬

正法寺町 鈴木典子

佳作 あれこれとやる気引き出す桜咲く

須越町 疋田弥栄子

佳作 百歳と決めて絶対前を向く

愛知郡愛荘町 青木郁子

佳作 吼えたらいいよ虎になれないお父さん

地藏町 大谷のり子

佳作 写真には映らぬ思い出胸の底

長浜市 勝木岩松



## 《総評》

彦根市民文芸に川柳部門が開設されたのは、昭和五十（一九七五）年度で、それ以来続いています。私は、これからも、この川柳部門が続いてゆくことを心から願っています。

私は、昭和六十二（一九八七）年度以来、三十六年間、この川柳部門の選者を務めてきました。これまでの作品の選評や総評を選者の立場を離れて読み返すと、各選者の川柳に対する情熱と応募者への期待が心に迫ってきます。

「彦根市民文芸作品入賞作品集」のバックナンバーは、彦根市立図書館で閲覧できるので、作品、選評、総評などを熟読していただきたい。必ず得るものがあると思います。そして、来年度も、あなたの思いを言葉で川柳にして相手に伝えてください。

青木 十九郎

今回は五十六名のご参加でした。三十句を選びましたが、二十六名の方には残念な結果になりました。またの機会のご入賞を期待しています。とはいえ、入選入賞を目指すような書き方や、選者に迎合したような句を作ることやめていただきたいし、自分の楽しみだけに作っているから選ばれなくてもいいんだというのも違うと思います。

そう言いながら、私も佳い川柳とはどのようなものかということが分かっていません。これまでにたくさん投句してきて採ってもらえなかった句のどこがいけなかったかと反省しながら、作ってきました。

選者になると選ばれなかった句の方を多く読むことになります。

今回も入賞三十句に対し選外一三六句。宝の山です。宝をどう生かすか、来年を期待しています。

重 森 恒 雄

昨年の総評で私は「立派な理想の姿を詠む必要はない」と書きました。

わずかな欠点と思える点があっても、何か惹きつけるものを持つた句というのがあって、それは人間というものの愚かさや健気さ、素晴らしさを示してくれる作品であると思っています。

この一年で世界も変わりました。コロナ禍の続く中でロシアのウクライナ侵攻があり、それを作品に詠まれた方もありました。

短詩形の中でも川柳は時事を詠むのが得意な文芸と言えます。理不尽な大きな力への批判や抗議を、たった十七音字で表現できません。

もちろん、そんなものは「ごまめの歯ぎしり」かもしれませんが、読んだ人が「私もそう感じていた」と思いを共有することができます。私自身が「川柳にはこんな力があつたのだな」と改めて思っています。

今回の応募作品は、一般論を述べた句よりも「今の自分はこう生きて、こう思っている」と書いてくださった川柳が多かったように思いました。

峯 裕見子

選者吟

われ卒寿バラの花束妻の手に

青木 十九郎

キミがいて林檎の花の咲かぬ里

重森 恒雄

そうなんだわかっていると土を掘る

峯 裕見子

